

クルフ語・マルト語の過去語幹

小林 正 人

東京大学

【要旨】 クルフ語とマルト語は、ブラーフイー語とともにドラヴィダ語族のうち祖語から最初に分岐した語派と考えられてきた。両言語の動詞は語彙的過去語幹をもつが、本稿では過去語幹にどのような古い接辞が取り込まれているかを分析した。

onq-「飲む」等舌頂音で終わる過去語幹はドラヴィダ語の過去接辞 *-t- に、-y- で終わる過去語幹は祖語の *-i- に帰せられるが、加えて *-nt- も存在した可能性がある。barc-「来る」、cic(c)-「与える」などの接辞 -c(c)- および残存形式である pos(s)-「降る」の -s- および mepj-「聞く」などの -j- はそれぞれ *-cc-, *-c- と再建され、クルフ・マルト語の改新と考えられる。

ドラヴィダ語の過去語幹 1. *-t(t)-, 2. *-i(n)-, 3. *-nt-, 4. 子音重複, 5. *-k-, 6. *-c(c)-, 7. *-a/e- のうち、クルフ・マルト語は 1, 2, (3), 4 を南語派と、1, 2 を中南語派と、1 を中語派と (Parji とは (3), 4, 7 も)、5~7 をブラーフイー語と共有している。本研究の結果は従来のドラヴィダ語族の系統樹の改訂を迫るものではないが、クルフ・マルト語が動詞形態法において古形を多く保存していることを明らかにした*。

キーワード: ドラヴィダ語族, 比較言語学, クルフ語, マルト語

1. はじめに

比較言語学において、ある語族の言語が分化した過程を系統樹モデルによって説明しようとする際、非典型的な言語をどう位置づけるかが常に問題となる。印欧語族におけるアナトリア語派やトカラ語派、チュルク語族におけるチュヴァシ語、セム語族におけるアッカド語などが例として挙げられるだろう。そうした異質な特徴をもつ言語は、それ以外の言語から再建される祖語を修正することでその枠内に組み入れられる場合もあるが、他の言語と大きく離れている場合は、印欧語学におけるインド・ヒッタイト仮説の近年の展開におけるように、祖語の初期の段階で他の言語から分岐したために違った体系をもつようになったと考えなければ合理的な再建が難しい場合もある (吉田 2006: 70ff. 参照)。

クルフ語¹ (Kuruḥ/ Kuruḥ) とマルト語² (Malto) はともにドラヴィダ語族に属する言語である。クルフ語は、インド憲法に定める指定部族であるオラオン (Oraon)

* 本研究は科学研究費補助金 (20520395) の成果に基づくものである。本稿の作成に当たっては、児玉望先生 (熊本大学) と高橋孝信先生 (東京大学)、および『言語研究』の査読者から貴重な助言をいただいた。この場を借りて篤くお礼申し上げる。

¹ 内バルウェ方言では [kuruḥ], 外バルウェ方言では [kūruḥ] と発音。本稿で引用する語形は内バルウェ方言のものである。

² [malto]。本稿で引用する形は、特にことわりのない限りサウリア・パハリヤの話す北部方言 (ジャールカンド州サーヘブガンジ県) のものである。

のうち、主にインド・ジャールカンド州西部からチャッティースガル州北東部にかけての高原地帯（チョーター・ナグブル高原西部）に居住する人々が話す言語であり、インドにおける話者は2001年の国勢調査によると1,751,489人である³。

マルト語はジャールカンド州の北東部、ヒンドゥスタン平原とベンガル平野を隔てている丘陵地帯（ラージマハル丘陵）に住む指定部族サウリア・パハリヤ（Sawriya Pahariya）、マル・パハリヤ（Mal Pahariya）、クマールバーグ・パハリヤ（Kumarbhag Pahariya）が話す言語で、話者人口はおそらく85,000から100,000程度と考えられる⁴。クルフ語が地域による方言差の少ない言語であるのに対して、マルト語には音素や動詞活用の違いから見て地域別に少なくとも4つ（北部、中央部、南部、西部）の方言が立てられ、その他に部族による方言差もある。

クルフ語とマルト語の間には、継続相や完了相といったアスペクト標示の有無（クルフ語あり、マルト語なし⁵）、主語と性・数・人称での一致を示す副動詞（converb）の有無（クルフ語なし、マルト語あり）、名詞文でコピュラ動詞が必須か否か（クルフ語必須、マルト語任意）など、文法的には大きな違いがある。しかし比較言語学から見た場合、南アジアの言語では稀な口蓋垂音 *q, *g またはそれに由来すると見られる音（Krx. /k^h, x/, Mlt. /q, g/）を音素として持つこと、半数程度⁶の語彙が規則的音対応を示すことから、他のドラヴィダ語族諸言語との間と比べて互いにきわめて近い類縁関係にあることが知られている（Hahn 1911: 123f.）。本稿は、過去語幹の形成法とそこに見られる音変化に基づいて、クルフ・マルト語がドラヴィダ語族の下位区分である南ドラヴィダ語派、中南ドラヴィダ語派、中央ドラヴィダ語派、およびブラーフイー語のいずれと近い関係にあるかを検討し、クルフ・マルト語には過去語幹に関して南ドラヴィダ語派、中南ドラヴィダ語派と共通点が多いものの、それらが共通の改新ではないことを主張する。

2. クルフ語、マルト語の概要

クルフ語とマルト語（北部方言）の音素を表1に示す⁷。

³ http://censusindia.gov.in/Census_Data_2001/Census_Data_Online/Language/partb.htm (2010年12月閲覧)による。なおネパールにも1991年国勢調査によれば15,175人の話者がおり、ブータン、バングラデシュにも話者がいると言われる。

⁴ 2001年のインドの国勢調査によると224,926人の話者がいるとされるが、ここにはおそらく別言語の話者であるオリッサ州の139,233人が含まれており、それを差し引くと85,693人となる。さらに、話者が一万人未満の言語は集計結果が公表されないため、マル・パハリヤとクマールバーグ・パハリヤが無視されている可能性があり、それを考慮に入れて上限をおおよそ100,000人とした。

⁵ ただし完了相を標示する形態的形式をもたない北部方言に対して、南部方言とマル・パハリヤの話す中央部方言には現在完了と過去完了の活用が見られる。

⁶ 『アジア・アフリカ基礎語彙集』（アジア・アフリカ言語文化研究所1967）から1～500の500語の約9割の語を比較した結果、意味がずれているものも含めるとほぼ半数の項目について規則的音対応を示す語形が両言語に見られた。対応語は例えば Krx. nerr 'snake' 対 Mlt. neru id., xedq 'foot' 対 qedu id., Krx. baṭi: 'arm' 対 Mlt. baṭi id., Krx. oṭox 'nail' 対 Mlt. orcu id.

⁷ c [tʃ], j [dʒ], y [j]。クルフ語の音素について、Gordon (1976: 28, 107f.) は形態素境界などに現

表1 クルフ語（左）とマルト語（右）の音素

子音	両唇	歯茎	反舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
無声閉鎖音	p, p ^h	t, t ^h	ʈ, ʈ ^h	c, c ^h	k, k ^h	ʔ
有声閉鎖音	b, b ^h	d, d ^h	ɖ, ɖ ^h	ɟ, ɟ ^h	g, g ^h	
鼻音	m	n		ɲ	ŋ	
接近音	w	l, r	ʎ, ʎ ^h	y, ʏ		
摩擦音		s			x, h	

母音	短母音	長母音
	a, ā	a:, ā:
	i, ī	i:, ī:
	u, ū	u:, ū:
	e, ē	e:, ē:
	o, ō	o:, ō:

両言語は名詞と動詞の派生および活用を接尾辞によって行う膠着的形態法をもち、名詞では性数格と主語との一致、動詞では主語との一致と時制、態、法、さらにマルト語の場合は否定を、接尾辞によって標示する。両言語がドラヴィダ語族に属することは、規則的音対応を示す多数の基本的語彙、例えば b 対 v の対応を示す Krx. barʔ-, Mlt. bar- ‘to come’ 対 DEDR 5270, Tamil varu- ‘to come’, Telugu vaccid-, Kolami var- id. etc. や、体系にかかわる形態素、例えば人称代名詞 Krx.=Mlt. e:n ʔ, e:m ‘we (EXCL)’, na:m ‘we (INCL)’, ni:n ‘you’, ni:m ‘you (PL)’ 対 Tamil ya:ŋ, ya:m, na:m, ni:, ni:m や、近称 i- と遠称 a- によるダイクシスを、他のドラヴィダ語族言語と広く共有することから明らかである。動詞形態法では他の多くのドラヴィダ語族言語と同様、動詞ごとに非過去語幹と過去語幹という二つの形式があり、それに時制または法を表す接尾辞と人称接尾辞をつけて定動詞形が作られる。以下の本稿では母音が後続するときの形を、Krx. okk-/ ukky- ‘to sit’ のように「非過去語幹 / 過去語幹」の順で表記する（平準化されたと考えられる形はカッコ内に入れる）。

その一方で、クルフ語とマルト語は他の多くのドラヴィダ語族言語に見られる語彙、例えば DEDR 333, Tamil a: ‘to come in existence’, Telugu agu, avu ‘to become’, Kolami an- ‘to be in a place’, Brahui anning ‘to be’ etc. や DEDR 3690, Tamil ni:r ‘water’, Telugu ni:ru ‘water’, Kolami i:r ‘water’, Brahui di:r ‘water’ etc., DEDR 4096, Tamil pa:l ‘milk’, Telugu pa:lu, pā:ɖi ‘milk’, Gadaba pa:l ‘milk’, Brahui pa:l ‘milk’ etc. を欠いており、反面 DEDR 3271, Krx. ti:xil ‘rice’, Mlt. ti:qalu id. のようにクルフ語とマルト語にしかない孤立語源項目が多い (Pfeiffer 1972: 184ff.)。また、Krishnamurti (1958/2001: 42) によれば、ドラヴィダ祖語には *k c t t p n ŋ n m y w r l [z]⁸ という子音が音素として

れる音素 /ə/ を想定し、残存母音 (relic vowel) と呼んだ。本稿では母音に先行する箇所でのその音素を、/ə/ ではなく声門閉鎖音 /ʔ/ と解釈する。それとは別に、高母音が後続する文脈での /ə/ の異音として [a] が現れる。マルト語には [ð] を /d/ とは別の音素として立てる見方があるが、筆者は語末等における /d/ の異音と解釈する。マルト語の南部と西部の方言では、/q/ に代わって /ʔ/ が、/g/ と /ŋc/ に代わって /h/ が現れる。

⁸ 記法は IPA に近くなるよう改めた。ʈ は無声歯茎閉鎖音、ŋ は歯茎鼻音、z は反舌接近音、y は硬口蓋わたり音。Krishnamurti (1997b) はこれに加えて喉頭音 *H を措定すべきとする。*ʈ に由来するタミル語の /t/ と、*z に由来する /l/ は、それぞれ本来は歯茎閉鎖音・はじき音と反舌接近音であったとされる。

再建されるが、クルフ語はドラヴィダ祖語になかったはずの有声・無声、有気・無気の音素的対立を持っている⁹。このように両言語はドラヴィダ語族言語としてやや特異である。

3. ドラヴィダ語族言語の下位分類

シュライヒャーによる語族の系統樹モデルでは、ある語族内の複数の言語が（独立した並行的発展でない）改新を共有する場合、それらの言語がその語族から分岐して独自に発展したためであると考え、それらが語族の下位区分である「語派」を作るとする。クルフ語とマルト語は上述したように近い類縁関係にあり、規則的音対応を示すことから、ドラヴィダ語族の下位区分としてのクルフ・マルト語や、節点としてクルフ語とマルト語が分かれる前の共通段階であるクルフ・マルト祖語 (Proto-Kurux-Malto) を想定することができる。しかし、両言語が他のどのドラヴィダ語族言語と共通の語派を作るかについては未だ学説の一致を見ない。特に他のドラヴィダ語族言語と系統的に最も離れているとされる、パキスタン・バローチスタン州で話されるブラーフイー語 (Brahui) が、クルフ・マルト語と単一の語派を作るかは難しい問題である。これまで提案されたドラヴィダ語の系統樹のうち、Grierson (1906: 284) はクルフ・マルト語の動詞の現在形がカンナダ語と、過去形が現代タミル語とそれぞれ似ていることを挙げて、クルフ・マルト語が後述の南ドラヴィダ語派と上位節点を共有するモデルを提案した。ブラーフイー語の起源を論じた Bray (1934: 17ff.) は、語頭の b 音, x 音の対応や語彙の共通性をもとにクルフ語, マルト語, ブラーフイー語の 3 言語を北部のドラヴィダ語族言語として扱った。「北ドラヴィダ仮説」と呼ばれるこの考えと、ブラーフイー語がなぜ他のドラヴィダ語族言語から遠く離れたバローチスタンで話されているかという「ブラーフイー問題」は、さまざまな議論を引き起こし、現在まで解決を見るに至っていない (Elfenbein 1987 参照)。

ドラヴィダ語族言語のうち、オリッサ州南西部からチャッティースガル州南部、マハーラーシュトラ州東南部にかけて分布する 5 ないし 6 の言語、Kolami, Naiki, (Naikri,) Parji, Ollari, Gadaba に関しては、Burrow and Bhattacharya (1953: xi) が語彙や複数形の作り方が共通することを指摘した。これらの言語は中央ドラヴィダ語派と呼ばれる。インドのタミル・ナードゥ州、ケーララ州、カルナータカ州に分布する 11 の言語、Tamil, Malayalam, Toda, Kota, Iruḷa, Kuṭumba, Koḍagu, Kannaḍa,

⁹ ドラヴィダ祖語にはなかったとされる有気音は、テルグ語などでもインド・アリア系の借用語中に見られるが、クルフ語ではインド・アリア系の借用語だけでなくドラヴィダ語族固有の語彙にも頻繁に現れる。Krx. xekk^ha: 'hand', Mlt. qe^q id., DEDR 2023 Tamil kai id. etc. におけるように、ドラヴィダ祖語 *q > クルフ・マルト祖語 *q > クルフ語 k^h という発展で生じた場合や、no:ɽʔ- 'to wash' に接辞 -Vɽʔ- をつけて作る再帰形が no:ɽ^h-orʔ- 'to wash oneself' と /ɽ^h/ を伴って現れるように、後続する /r/ など隣接音によって有気音が生じる場合があることが知られている (Pfeiffer 1972: 103, 54)。mecc^ha: 'high, tall' (Mlt. mecg-e), gec^ha: 'far' (Mlt. gec-e) におけるように由来不明の有気音も多い。

Badaga, Koraga, Tulu については, Emeneau (1967) によって「南ドラヴィダ語派」という下位区分が確立された¹⁰。主にアーンドラ・プラデーシュ州で話されるテルグ語 (Telugu) については, 南ドラヴィダ語派の特徴をもつものの, 音韻変化の共通性から見てデカン高原各地で話される Gondi 語やオリッサ州で話される Kui 語, Kuvi 語 (および後に発見されたアーンドラ・プラデーシュ州, オリッサ州の Pengo, Maṇḍa, Koṇḍa) と近いことが, Krishnamurti (1961: 236ff.) によって示された。Krishnamurti (1961) や Subrahmanyam (1969: 739) は, これらの言語が上述の中央ドラヴィダ語派と一つのグループをなすと考えたが, Krishnamurti (1975: 339/2001: 143, 2001: 96f.) は二人称複数代名詞の -r, 語頭の *c > h, 高母音 *i *u が *a の前で *e *o に下がることなど, むしろ南ドラヴィダ語派と近い特徴を示すことを指摘した。ドラヴィダ比較言語学の標準的のハンドブックである Krishnamurti (2003: 492ff.) は, 分類基準となる 36 の特徴を挙げた上で, 共通の中間段階「南ドラヴィダ祖語」から分岐したものとして「南ドラヴィダ語派/南ドラヴィダ語派 I」(タミル語から Tulu 語) と「中南ドラヴィダ語派/南ドラヴィダ語派 II」(テルグ語から Koṇḍa 語) を立て, その両語派の分化以前に分岐したものとして中央ドラヴィダ語派 (Kolami 語から Gadaba 語), さらに前の分派として北ドラヴィダ語派 (ブラーフイー語, クルフ語, マルト語) を立てる見方を呈示している。

なお, 言語の系統を判断する基準としてしばしば語彙の類似が挙げられるが, Krishnamurti が分類基準とした 36 の特徴のうち, 13 が音韻に関するもの, 残りの大半は形態法および機能語に関するもので, 内容語に関する特徴は少ない。ある言語に偶々ある語が欠けているとしても, 共通の意味変化や語彙の置き換えといった改新が複数の言語にまたがって見られない限り分類の根拠とはなりえないので, 語彙の比較による系統樹作成には限界がある。

さて, さきに挙げた「ブラーフイー問題」を追求した Emeneau は, 「北ドラヴィダ仮説」を支持する事実として, 次の a) から g) の共通点を挙げた (Emeneau 1962: 62ff.)。

- a) ドラヴィダ祖語の *k が, 軟口蓋閉鎖音 k, g と, q, x などの音に分かれて現れること (Krx. /kʰ/ /x/, Mlt. /q/ /g/, Brahui /x/)。
- b) 祖語の *c が /c/ などの硬口蓋または硬口蓋歯茎音と /k/ などの軟口蓋音に分かれて現れること。
- c) 軟口蓋閉鎖音の接辞 -k-/-g- で過去形を作ること (但し南ドラヴィダ語派とされる Koraga 語でも)。
- d) 祖語の *w が語頭で /b/ として現れること (但し Kannaḍa-Koḍagu-Tulu 語でも)。
- e) 未来時制や不確定的モダリティを接辞 -o-/-o:- で表すこと (Ramaswami Aiyar 1929: 117)。

¹⁰ ただし Tulu 語と Koraga 語が南ドラヴィダ語派に属するかどうかについては異論がある。

- f) 過去語幹に硬口蓋音の接辞 -c/-cc- やそれに由来する音が見られること (Emeneau 1962: 41. 6.1 参照)。
- g) DEDR によれば Krx. be:k 'salt', Mlt. be:ku id., Brahui be: id. などわずか5例だが、クルフ語, マルト語, ブラーフイー語だけにしか見られない項目があること (493, 2189, 2278, 4428, 5131)。McAlpin (2003: 525), Andronov (2006: 111ff.) に追加の項目が挙げられている。

これらの特徴を見る限り、3言語に一定の類似性があることは否定できない。しかしブラーフイー語とクルフ・マルト語に共通する語彙項目がブラーフイー語と他のドラヴィダ語族言語との間と比べて多いわけではなく、共通の改新とされるものも並行的発展である可能性を排除できないので、語派を立てる根拠とするには決め手に欠ける。McAlpin (2003: 543) はこのうち a) について、クルフ語, マルト語において口蓋垂音またはそれに由来すると考えられる音 Mlt. /q/ /g/, Krx. /kʰ/ /x/ が音韻的文脈にかかわりなく出現することから、ドラヴィダ祖語の音素 *k が分化したのではなく、むしろ祖語に存在した口蓋垂音 *q *g と軟口蓋音 *k *g の音素的対立がクルフ語, マルト語で保持されたものであると考えた。同様に b) についても、軟口蓋音 *k と前寄り軟口蓋音 *k̠ の音素的対立がクルフ語, マルト語で保持されたものと説明し、3種の舌背音をドラヴィダ祖語に措定した (表2)。この説によれば、これまでドラヴィダ祖語と考えられてきたものはドラヴィダ祖語より後の、クルフ・マルト語が分岐した後の中間段階ということになる。

表2 McAlpin (2003) によるドラヴィダ祖語の閉鎖音の改訂

従来の PDr.	PKM	改訂 PDr.	例 (括弧内は DEDR の番号)
*k	*q	*q	Krx. xann 'eye', Mlt. qanu, Br. xan vs. Tamil kaṅ (1159)
*k	*k	*k	Krx. kaṭṭ- 'to cross', Mlt. kaṭ- vs. Tamil kaṭa (1109)
*c	*k	*	Krx. kuṭ- 'to be hot', Mlt. kuṭ- vs. Tamil cuṭu, 'to burn (2654)
*c	*c	*c	Krx. cī:c-, Mlt. ci:c- vs. Tamil ci: 'to wipe, sweep' (2599)

そして McAlpin は、「北ドラヴィダ語派」の3言語には語派と言えるような共通の改新はなく、ブラーフイー語とクルフ・マルト語がそれぞれ個別にドラヴィダ祖語から分かれたという樹形図を提案した (図1)¹¹。クルフ語, マルト語が他の多くの点で改新的であるにしても、McAlpin の議論は比較言語学的に正当であり、反論することは難しい¹²。

¹¹ Steever (1993: 9), Andronov (2003: 21) もブラーフイー語とクルフ・マルト語が個別の語派であるという可能性を述べている。

¹² ドラヴィダ祖語の音素の保持という点でもう一点挙げられることは、祖語の硬口蓋または硬口蓋歯茎閉鎖音 *c が南ドラヴィダ語派と中央ドラヴィダ語派では語頭で s- に軟化したり消失したりするのに対して、クルフ語とマルト語では閉鎖音として保持されていることである (Emeneau 1988: 242, Krishnamurti 2003: 122)。なお、ドラヴィダ祖語に措定される反舌音 *ʃ と *ɳ、反舌接近音 *ʒ はクルフ語, マルト語ともに他の音素と合流してしまっている。

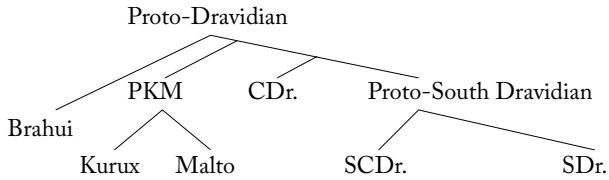


図1 McAlpin (2003) に基づいた樹形図

4. 問題

さて, Emeneau (1962: 63) が「北ドラヴィダ語派」の共通点 c) として挙げた, -k- で過去形を作ることだが, 具体例を挙げると上述の動詞 Krx. barʔ- ‘to come’, Mlt. bar- id. の過去形は, まず非過去語幹 barʔ-, bar- を過去語幹 barc- に替えた上で, 過去接辞 -k- と人称接辞を付けて作られる: Krx. barc-k-an, Mlt. barc-k-en {come.PST-PST-1SG}。しかし, マルト語の中央, 南, 西の諸方言で過去接辞として -k- ではなく -t- を用いること (barca-t-an)¹³, また過去接辞 -k- がクルフ語の完了相動形容詞を作る接辞 -ka: (例えば Krx. xa:y-/ xayy- ‘to dry’ から作った Krx. xay-ka: ‘dry’) に似ていることから¹⁴, -k- 過去形と呼んでいるものは実は動形容詞に人称接尾辞をつけた形と見ることもでき, クルフ・マルト語内部での改新である可能性がある。マルト語では主語と同格の名詞・形容詞は主語に一致する人称接尾辞を取るので, 例えば非過去語幹に接辞 -pe をつけて作られる受身分詞は, 定動詞とまったく同じ人称接尾辞を取り, また名詞+形容詞の文ではコピュラ動詞は必須でないので, 次の (1) におけるように定動詞と同様それだけで述語として機能する:

- (1) Mlt. aḡa-d banar-pe-d {house-NM be.made-PASS-NM} 「家が作られている」。

述語として機能するとき, 語根・接辞・主語に性数で一致する人称接尾辞の3要素から成るという点では, マルト語の定動詞, 動形容詞, 副動詞, 形容詞, 名詞に形式上の区別はない (表3)¹⁵。

表3 マルト語の定動詞, 副動詞, 動形容詞, 形容詞, 名詞の述語形 (一部のみ)

	定動詞現在形	未完了副動詞	受身の動形容詞	形容詞 jinp-ro	名詞 mal-e
1 人称単数	kor-i-n	kor-ne-n	kor-pe-n	jinp-ro-n	mal-e-n
2 人称単数男性	kor-ne-y	kor-ne-y	kor-pe-y	jinp-ro-∅	mal-e-y
3 人称単数男性	kor-i-h	kor-ni-h	kor-pe-h	jinp-ro-h	mal-e-h

¹³ *-t- および *-tt- は Tamil cey-/ cey-t- ‘to do’, koṭu-/ koṭu-tt- ‘to give’ におけるように, 過去接辞として他の多くのドラヴィダ語族言語から再建される (5.1., 5.2., 6.1. 節参照)。-a- については 6.1. 節を参照。

¹⁴ 生産的ではないものの, マルト語においてもこれに対応する qayek(e) ‘dry’ (qa:y-, qa:y- ‘to dry’ から) など数語に -k 接辞が見られる。接辞 -k- については 6.1. 節を参照。

¹⁵ Kothandaraman (1976: 362) もタミル語の定動詞が名詞句としての性質をもつことを指摘している。

印欧語族では、動詞語根と時制語幹だけでなく、人称語尾の一部も祖語にまで再建されており、祖語の段階から主語との一致を示す定動詞が存在したことが確認される。一方ドラヴィダ語族においては、動詞活用を再建する根拠は必ずしも強くない。まずドラヴィダ語族の言語では、動詞語根やそれに派生接辞のついた語基までは比較的共通しているが、その後につく時制接辞や人称接辞はまちまちで、定動詞活用を単一の祖形に還元することは容易でない。またドラヴィダ語族言語の最古の文字資料であるタミル・サンガム文献においては、Tamil iru- ‘to be’ の非過去語幹として等機能の iru-kk- と iru-pp- が現れたり (Rajam 1992: 567), ka:ŋ-k-um {see-NPST-1PL} ‘we shall see’ 対 niŋ-k-um {stand-NPST-3SG.M} ‘he would stand up’ (Rajam 1992: 619f.) のように 1 人称複数と 3 人称単複に同じ人称接辞 -um が用いられるなど、語幹・時制接辞・人称接辞の結びつきが現在のドラヴィダ語族言語に比べてはるかに柔軟であったように見える。これらの事実から、ドラヴィダ祖語の段階では主語との性数の一致を示す定動詞形は定まっておらず、各語派、ときには各言語で代名詞の短形と言える人称接辞が付加されて¹⁶、現在あるような定動詞形が個別に発達したと推測される。

さらにクルフ語とマルト語では、-k- 接辞による過去定動詞形は一人称、二人称においてしか現れず、三人称の形は -k- 接辞の付かない過去語幹 *barc-* にじかに人称接辞 *Krx* -(a)s, *Mlt.* -(a)h (a 要素については 5.6 節参照) を付加して作られる: *Krx.* *barc-as*, *Mlt.* *barc-ah* {come.PST-3SG.M.}。通言語的に見て、三人称に無標の形が現れる言語は多い¹⁷ ので、-k- の付いた一、二人称形が -k- のない三人称形に対して有標と考えられるし、過去語幹ですでに完了の意味が表されている以上¹⁸、-k- 接辞はあとから二重の特徴づけとして付加されたものである可能性が高い。本論文では、クルフ語・マルト語の一、二人称の過去定動詞形ではなく、過去語幹や過去語幹から直接作られる三人称形がより古い形態法を反映しているとの立場を取る (Andronov 2003: 215)。

過去語幹は非過去語幹¹⁹ から接辞付加などの形態的操作を経て作られた形で、それ自身「～しながら」の意味をもつ副詞的分詞として単独でも現れる。過去語幹の

¹⁶ クルフ・マルト語の場合は、一人称複数包含形と二人称以外で人称接辞は代名詞の短形である。マラーヤラム語では古くは人称・性数による語尾があったが、のちに消滅した。なお現在のクルフ語やマルト語において、*Krx.* *akku: e:m ka:l-d-am e:m* {now we.EXCL go-PRS-1PL.EXCL we.EXCL} 「それじゃ私たちは行くよ」(自然発話) のように定動詞の後に再度人称代名詞を添える話し方が頻繁に見られることも、人称接辞の起源を考える参考になるかも知れない。¹⁷ つとに Benveniste (1946: 4ff.) がこのことを指摘している。たとえばペルシャ語の動詞の過去形や、ハンガリー語の多くの動詞活用で三人称単数が無標形である。

¹⁸ ドラヴィダ語族のほとんどの言語は過去語幹をもつが、中には *Toda* 語のように完了相の意味を失い、そこから非過去形を作るものや (Emeneau 1984: 114)、現代タミル語の進行表現 *vantu konŋu iru-kkiŋ-e:ŋ* {come.PST take.PST be-PRS-1SG} 「私は来るところだ」のように過去語幹を用いて進行相を表すものもあり、本来の時制・アスペクトの意味がしばしば薄れている。

¹⁹ 非過去語幹は動詞語根と同一か、あるいは動詞語根に他動詞接辞や受身・再帰接辞など派生接辞がついたものである。本稿の主題は時制接辞であるので、以下では動詞語根ではなく非過去語幹を基点として過去語幹形成法を論じる。

形成法は多くの場合語彙的であり、クルフ語、マルト語の形態論のもっとも複雑な部分であるが、形態上の不統一は過去における規則的な音変化の結果である場合があるので、以下において Grignard (1924a: 65ff, 1924b), Droese (1884), Mahapatra (1979: 157f, 1987) および筆者の現地調査に基づいて過去語幹形成法をパターンによって4類²⁰にまとめ、背後に働いている音変化を考察したい。第1, 2, 3類の動詞は両言語に例証されているものから代表的な例を挙げる。

第1類：クルフ語、マルト語ともに末尾に /y/ を添加して過去語幹を作るもの。クルフ語の第2類、第3類の非過去語幹の末尾にしばしば現れる /ʔ/ はこの類の動詞では決してつかない。

- (2) Krx. att-/ atty- ‘to wear’, Mlt. at-/ aty- id.
- (3) Krx. arg-/ argy- ‘to climb’, Mlt. arg-/ argy- id.
- (4) Krx. e:r-/ i:ry- ‘to see’, Mlt. e:r-/ e:ry- id.

また、過去語幹で語根母音が短くなる動詞があり、**第1類b**と呼ぶ。

- (5) Krx. e:k-/ (i:ky-) ‘to walk’, Mlt. e:k-/ eky- ‘to go’
- (6) Krx. pa:k-/ pakky- ‘to take in the lap’, Mlt. pa:k-/ paky- id.
- (7) Krx. mū:ʔ- (Grignard 1924b mū:d-)/ muddy- ‘to strike or dash against some obstacle, to walk into’, Mlt. mu:nd- / (mu:ndy-) ‘to gore’ (Droese 1884)

第2類：現在形で Krx. -ʔ- : Mlt. -θ-/-y-, 過去語幹で Krx. -c, -cc : Mlt. -c という交替をするもの。/ʔ, y/~c/ という交替は生産的で、Krx. jitʔ-/ jite-, Mlt. ji:ty-/ ji:tc- ‘to win’, CDIAL 5224, Hindi ji:t-na: ‘to win’ etc. のようなインド・アーリア語から借用した動詞語幹も多くこの交替で過去語幹を作る。

- (8) Krx. beʔ-/ (biccy-) ‘to be’ (Grignard 1924b)²¹, Mlt. beh-/ behc- (南部 bey-/ becc-) id.
- (9) Krx. hoʔ-/ hocc- (Grignard 1924b occ-) ‘to take’, Mlt. oy-/ oc- id.
- (10) Krx. ciʔ-/ cicc- ‘to give’, Mlt. ciy-/ cic- id.
- (11) Krx. barʔ-/ barc- ‘to come’, Mlt. bar-/ barc- id.

第2類にも語根母音が長短の交替を示すもの (**第2類b**) があるが、第1類b、第3類bと違って過去語幹で母音が長くなる (5.5. 節参照)。

- (12) Krx. heʔ-/ he:c- ‘to tie’, Mlt. ey-/ e:c- id.
- (13) Krx. coʔ-/ co:c- ‘to put on (dhoti etc.)’, Mlt. cuy-/ cu:c- id.
- (14) Krx. coʔ-/ co:c- ‘to rise’, Mlt. coy-/ co:c-

²⁰ 本論では扱わないが、ここで挙げる4類の他に、補充法を示す動詞 Krx. ka:l-/ ker- ‘to go’, Mlt. ka:l-/ eky- ‘to go’ や、Mlt. maʔ- ‘to like’ のように過去語幹の欠如した動詞がある。

²¹ コピュラ動詞だが、インド・アーリア系語彙の raʔ-/ rahc- (CDIAL 10666) で置き換えられて現在では使われない。

第3類：非過去語幹に何も付加されずに過去語幹が作られるもの。クルフ語形では非過去語幹末の /ʔ/ が過去語幹には現れないので、非過去語幹を基本形とするとマイナス接辞による派生形と見える場合がある。

- (15) Krx. ki:dʔ-/ ki:d- ‘to put to bed’, Mlt. ki:d-/ ki:d- ‘to place’
 (16) Krx. e:dʔ-/ e:d- ‘to show’, Mlt. e:d-/ e:d- id.
 (17) Krx. poll-/ poll- ‘to be unable’, Mlt. pol-/ pol- id.

過去語幹で語根の母音が短くなる動詞があり、**第3類b**と呼ぶ。

- (18) Krx. mo:x-/ mokk^h- ‘to eat’, Mlt. mo:q-/ moq- id.
 (19) Krx. (ax-)/ akk^h- ‘to know’, Mlt. a:g-/ aq- id.
 (20) Krx. xa:y-/ xayy- ‘to dry’ (, Mlt. qa:y-/ qa:y- id.)

これらの3類に加えて、少数ながら不規則な過去語幹をもつ動詞があり、それらを第4類と呼ぶ。第4類の中には、添加される音に応じてさらに4つの下位区分が立てられる。少数であるので、クルフ語、マルト語の一方にのみ例証される動詞も挙げる。

第4類

-d/-t 群 (Krx. /n~/nd/, /t²~/dqd/, /t~/tt/ : Mlt. /n~/nd/, /l~/d/, /t~/t/) :

- (21) Krx. on- (Grignard 1924b o:n-)/ onq- ‘to drink, eat rice’, Mlt. o:n-/ onq- ‘to drink’
 (22) Krx. xaʔ-/ xaqd- ‘to steal’, Mlt. qal-/ qaq- id.
 (23) Krx. nal-/ (naly-) ‘to dance’, Mlt. lal-/ laq- id.
 (24) (クルフ語形なし,) Mlt. pu:n-/ pund- ‘to put on one’s neck’
 (25) Krx. kuʔ-/ kutt- ‘to grow warm’, Mlt. kuʔ-/ kuʔ- ‘to burn, to roast’

-t 群 (Krx. /s~/tt/ : Mlt. /h~/t/) :

- (26) Krx. pes-/ pett- ‘to gather up’, Mlt. peh-/ pet- ‘to take up’
 (27) Krx. xos-/ xott- ‘to cut by striking, to decapitate’, Mlt. qōh-/ qot- ‘to cut down’
 (28) Krx. ass-/ (assy-) ‘to sound’, Mlt. āh-/ at- ‘to beat (drum)’
 (29) Krx. tess-/ (tissy-) ‘to plait’, Mlt. teh-/ tet- ‘to knit, to weave’

-s 群 (Krx. /y~/ss/, Mlt. /y~/s/) :

- (30) Krx. uy-/ uss- ‘to plough’ Mlt. (us-/ us-, usy-) id.
 (31) Krx. poŷy-/ poss- ‘to fall (of rain)’, Mlt. poy-/ pos- id.
 (32) Krx. xoy-/ xoss- ‘to reap’, Mlt. qoy-/ qos- id.

-j 群 (Krx. /θ/ ~ /j/, /y/ ~ /jj/, Mlt. /θ~/~j/, /y,l/ ~ /j/, /h/ ~ /nj/) :

- (33) Krx. xoy-²² / xojj- ‘to measure’, Mlt. qoy-/ qoj- id.

²² 現地調査では確認できず。Grignard (1924b) によれば動名詞のみ xo:y-na: と母音が長い。

- (34) (Krx. ijʔ-/ ijj- ‘to stand’,) Mlt. il-/ ij- ‘to stand’
 (35) (Krx. injʔ-/ inj-, injc- ‘to shoot arrows’,) Mlt. ih-/ inj- ‘to pelt’
 (36) Krx. man-/ majj- ‘to become, be’, Mlt. men-/ mejj- id.
 (37) Krx. men-/ mejj- ‘to hear, to ask’, Mlt. men- (南部, 中央部 me:n-)/ mejj- id.
 (38) Krx. nan-/ najj- ‘to do’, (Mlt. nan-/ nany- id.)
 (39) Krx. pā:n-/ pajj- ‘to ripen’, Mlt. pa:n-/ pa:jj- (Mahapatra 1987 pajj-) id.

5. 不規則な過去語幹に反映される音変化

クルフ語, マルト語のうち, クルフ語の音が他のドラヴィダ語族言語の何に対応し, さらにドラヴィダ祖語の何という音に遡るかについては, Pfeiffer (1972) が詳細に論じている。Gordon (1976) はネパールのクルフ語方言の現地調査をもとに音韻の共時的・通時的考察を行い, 子音連続の中に決して分離しない真の連続 (close transition) と, 音韻的文脈によって分離する見せかけの連続 (open transition) がある (Gordon 1976: 64)²³, クルフ語の先頭音節において, xess「稲」対 xēs「血」におけるように短母音の後に子音重複が, 長母音の後に単独子音が現れる現象について, 母音の長さによって重複するかどうか条件づけられている可能性がある (Gordon 1976: 60f., 127f.), という重要な指摘を行った²⁴。その後の研究は主にこの二著の分析を踏襲しているが, この二著の分析ではクルフ語形からクルフ・マルト祖語形を経ずにドラヴィダ祖語形を導出するなど, マルト語の音韻交替への考慮が尽くされているとは言えない。以下では, 第4類に見られる Mlt. /l~/d/, /s~/t/, /h~/t/, /y~/s/, /y~/j/, /h~/nj/, Krx. /t~/dd/, /s~/tt/, /y~/ss/, /y~/j/, — という交替の起源を中心として, クルフ・マルト祖語における過去語幹の形成法を考察する。

5.1. 第4類 d/t 群

Krishnamurti (1997a/2001: 286) によると, 例えばタミル語の動詞 nil ‘to stand’ とそれに他動詞接辞 *-t- がついた niru (ɾ < *t) ‘to make stand’ の対に見られるように, ドラヴィダ祖語で *-lt- > *-t- といった舌尖閉塞音形成 (Apical Obstruent Formation) が起こったという。クルフ語とマルト語の前段階でも形態素境界に /r/ 以外の接近音 + 閉塞音の連続が生じた場合, よく似た調音位置の同化と子音連続の単純化が起こったと考えることで, この交替は理解できる。(23) Mlt. lal-/ laq- ‘to dance’ における語幹末の /l/ と /d/ の交替は, 非過去語幹と過去語幹が PDr. *nal- (DEDR 3612, Kota nayl/ nalc ‘to play’ etc.) とそれに過去接辞 *-t- のついた *nal-t- の交

²³ 一例を挙げると, Krx. bacc-/ baccy- ‘to rob’ と bacʔ-/ bacc- ‘to read’ の過去語幹はともに cc を含むが, 例えば過去形一人称単数では前者が bacc-kan であるのに対して, 後者は bacac-kan のように cc が分離する。

²⁴ それでもなお, たとえば poll- ‘to be unable’ と koll- ‘to open’ のように一見同じライムをもつ動詞語根で, pol-d-as {be.unable-PRS-3SG.M} や koll-d-as {open-PRS-3SG.M} のように子音重複に違いが出る場合があり, 相補分布しているわけではない。前者の子音重複が二次的と考えられるが, 詳細はまだ解明されていない。

替に由来し²⁵、調音位置の同化²⁶と子音連続の単純化によって *t > *d > d という変化を経たと説明できる。ドラヴィダ祖語に指定される反舌側面音 *l と反舌鼻音 *ŋ は、クルフ語、マルト語とも /l/ /n/ にそれぞれ合流する一方、*t に由来する /d/ は /d/ との音素的対立を保持しているの、過去語幹では *l または *ŋ に調音位置が同化した d が保たれている。(22) Krx. xaŋʔ-/ xadq-, Mlt. qal-/ qaq- id. < *qa[-/ *qa[-t- (DEDR 1372, Tamil ka['to rob' etc.) では、マルト語形が同じ交替を示す²⁷。

(25) Krx.=Mlt. ku[- は、DEDR 2654 Tamil cuŋu/ cu[- 'to be hot, to burn', Telugu cū:ḍu 'to burn', Kolami suq-/ su[- 'to cook' から PDr. *ku[-/ *ku[-t- と再建され、調音位置の同化によって PKM *kutt- > Krx. kutt-, Mlt. ku[- となったと説明される。(21) Krx.=Mlt. o(:)n-/ onq- における /n/ と /nd/ の交替も、PDr. *u(:)ŋ- (DEDR 600 Tamil=Malayalam uŋ, Parji=Gadaba un- etc.) にやはり過去接辞 *-t- がついた *-ŋ-t- が調音位置の同化と有声化によって /nd/ [ŋd] になったと説明できる (Subrahmanyam 1971: 196, Puttaswamy 2009: 80)。過去接辞 *-t- はほとんどのドラヴィダ語族言語に例証される上、中央ドラヴィダ語派の Gadaba 語に un- 'to eat, drink' に対して接辞が例外的に有声化した unq- という過去語幹 (Bhaskararao 1980: 40) が、Parji 語にも un- 'to drink' に対して例外的な反舌化を示す過去語幹 unq- (Burrow and Bhattacharya 1953: 45) があり、クルフ語・マルト語の onq- も不規則型であることを考えると、起源を同じくする可能性が高い、つまり古いタイプの過去語幹と考えられる (6.1. 節参照)。(24) Mlt. pu:n-/ pund- も DEDE 4361 Tamil pu:ŋ-/ pu:ŋ[- 'to put on' etc. から PDr. *pu:ŋ-/ *pu:ŋ-t- と再建され、調音位置の同化と子音連続の前の母音短縮で説明される。

5.2. 第4類 t 群

ドラヴィダ祖語には *s などの舌頂摩擦音はなかったとされるが、クルフ語、マルト語は /s/ を音素として持っている。Pfeiffer (1972: 74f.) は、クルフ語 (とマルト語) の /s/ の起源の一つがドラヴィダ祖語の歯茎閉鎖音 *-t- であることを指摘した。例えば(40)におけるように、クルフ語、マルト語とも /s/ で現れる語が見られる。

- (40) Krx. pisa: 'afterwards', Mlt. pisi 'below', DEDE 4205 Tamil piŋ 'back, rear', piŋaku 'afterwards' etc. (Tamil p < PDr. *t); Krx. kē:s-/ kī:sy- 'to sift', Mlt. ke:s-/ ke:sy- id., DEDE 2019 Malayalam ce:ruka 'to winnow ...' etc.

²⁵ 語頭の *n は、Krx. ne:la: 'yesterday' 対 Mlt. le:le id., Krx. noll-/ nully- 'to scoop out' 対 Mlt. lol-/ loly- id. と同様、マルト語の北部方言で後続音節が /l/ で始まる場合同化され /l/ となる。

²⁶ ドラヴィダ祖語の過去接辞 *-t- は、弁別素性 [+anterior] と [+distributed] の値が指定されておらず、直前の舌尖音の値に同化して歯音、歯茎音や反舌音になったと考えられる。

²⁷ この動詞のクルフ語形がなぜ非過去語幹で /t/ をもつかはよく分からない (Pfeiffer 1972: 133, 156 'unclear')。クルフ語にはマルト語におけるような /l/ と /d/ の交替ではなく、/t/ と /d/ の交替が見られ、Krx. eŋʔ-/ eŋq- 'to call, to summon' (DEDE 786), Krx. caŋʔ-/ caŋq- 'to uproot', Krx. ceŋʔ-/ ceŋq- 'to raise a burden from above ground' (Mlt. ce[-/ ce[- 'to convey, to carry', DEDE 2762) も同様の交替を示す。

しかし4節で見た(26) Krx. pes-, Mlt. peh- (DEDR 4423), (27) Krx. xos-, Mlt. qoh- (DEDR 2132²⁸), (28) Krx. ass-, Mlt. āh- (DEDR 320), (29) Krx. tess-, Mlt. teh- (DEDR 3446) (いずれもマルト語形への言及なし) や代名詞 Mlt. a:h ‘he’ 対 Krx. a:s < PKM *a:-t- ← PDr. *awant- のように、特に動詞の非過去語幹末においてクルフ語 /s/ 対マルト語 /h/ という対応を見せる一群の語がある。DEDR ではこれは音変化とは考えられていないが、これらの5例からドラヴィダ祖語の *-t- が形態素末で Krx. /s/ (> /ss/), Mlt. /h/ になった (PDr. *-t- > Krx. s, Mlt. h / V_]morpheme) という音変化が立てられる²⁹。非過去語幹末が *-t- であったとすると、5.1. 節と同様過去接辞 *-t- によって、PDr. *-t-t- > *-tt- > Krx. /tt/, Mlt. /t/ として過去語幹末の tt, t が説明できる。

5.3. 第4類 s 群

第4類 s 群動詞の非過去語幹末の /y/ は、他の言語との対応から考えて、(30) Krx. uy- (DEDR 688 Tamil ulu ‘to plough’ etc., Burrow 1968: 64) のようにドラヴィダ祖語の *z に由来する場合と、(31) Krx. poṅy-, Mlt. poy- (DEDR 4407 Tamil pey ‘to rain’ etc.) と (32) Krx. xoy-, Mlt. qoy- (DEDR 2119 Tamil koy ‘to pluck’ etc.) のように *y に由来する場合がある。

過去語幹末で /y/ に代って /s/ が出現することは、どう説明できるだろうか。上の5.2. 節でクルフ語、マルト語の /s/ の一部が PDr. *-t- に由来すると述べたが、*1 のように *t と交替する音素がある環境ではなく、また *-t- が単独で過去接辞となると考える根拠は乏しいので、第4類 s 群動詞の過去語幹末の /s/ を PDr. *-t- によって説明するのは難しい。/s/ のもう一つの起源としては、ドラヴィダ祖語の語中の単独音の *-c- が知られている (Pfeiffer 1972: 125ff, cf. Krishnamurti 2003: 148) :

- (41) Krx. kassa: ‘dirt on the body’, Mlt. kase id., DEDR 1088 Tamil kacaṭu ‘uncleanliness’ etc.
 (42) Mlt. qas-/ qasy- ‘to become bitterish’, DEDR 1249 Tamil kaya ‘to be bitter’, kacappu ‘bitterness’³⁰

PDr. *-c- に遡ると考えられる過去接辞は、中南ドラヴィダ語派を中心として南ド

²⁸ DEDR 2132 には PDr. *-t- を反映する語形は挙がっていないが、舌尖閉塞音形成規則で、*-t-t- > *-t- という接辞添加がマルト語 qoh- の前段階で起こったと仮定して、この項目に属すると考えて引用した。

²⁹ このことは Gordon (1976: 123) も、(26) Mlt. peh-/ pet- の h に関して、明言していないがおそらく考えていたものと思われる。*-t- > h が規則的音変化であったなら、Mlt. ke:s- 等は平準化による形と説明する必要がある。

³⁰ さらに、DEDR 4410 Tamil peyar ‘name’, Kannada pesar(u) id., Tulu pudarṇ id. etc. に見るように、ドラヴィダ祖語の段階で、*-y- と *-c- との交替があったことが、Krishnamurti (2003: 154) によって指摘されており、クルフ語、マルト語の /ss/ : /s/ が、他の言語の /y/ と対応していることがある : Krx. ess-/ issy- ‘to weave’, Mlt. es-/ es- ‘to plait’, DEDR 3745 Tamil ney-, necavu ‘weaving’, Krx. xē:so:, Mlt. qe:so ‘red’, DEDR 1931 Tamil ce:y, Brahui xi:sun etc.。あるいは Krx. baṅy-/ baṅy- ‘to thatch’, Mlt. bes- id., DEDR 5532 Tamil ve:y ‘to cover’ のように、クルフ語が *y をもつ形、マルト語が *c をもつ形に由来していると思われる場合もある。

ラヴィダ語派の Toda 語, 中央ドラヴィダ語派の Parji 語に見られる。ただしそれらは過去接辞 *-t- が口蓋化³¹したものとして基本的に説明可能である。Krishnamurti (2003: 298f.) は *-c- ではなく, *-cc- を祖語の過去接辞として立てているが, *-cc- は Krx. /c(c)/, Mlt. /c/ となると予想されるから, クルフ・マルト語から考えるとこれらの語には *-c- を想定すべきだろう (6.1. 節参照)。

ドラヴィダ祖語の *-yc-, *-zc- が 5.1. 節で述べた接近音 + 閉塞音の単純化規則によってクルフ・マルト語で *y, *z を失って *-c- となり³², それが上述の *-c- > s で Krx. /ss/ (クルフ語における二次の子音重複, 5.6. 節参照), Mlt. /s/ となったと考えられると, s 群の Krx. /y~/ss/, /y~/s/ という交替が説明できる (Burrow 1968: 68)。なお中南ドラヴィダ語派のテルグ語でも orayu/ oras- 'to rub', kiniyu/ kinis- 'to grow angry' のように -ayu, -iyu で終わる 3 音節の動詞の非過去語幹で /y~/s/ の交替が見られることについて, Krishnamurti (1961: 147ff.) は Gondi 語形に基づいて *-y-ci に由来すると説明し, *yc の *y が消失して *c が摩擦音になることが南ドラヴィダ語派と中南ドラヴィダ語派に広く見られることを指摘している。

5.4. 第4類 j 群

この群の動詞は, 非過去語幹がまちまちなので, 個別に考察する。

(34) Mlt. il- は PDr. *nil- 'to stand' (DEDR 3675, Tamil nil- 'to stand' etc.) の先頭音が脱落したものと考えられる。クルフ語, マルト語中には /l/ ~ /j/ という交替は他に例がないが, 5.1. 節, 5.3. 節で述べた接近音 + 閉塞音の連続で接近音が脱落する現象がこの語でも起こっていたと考えれば, 非過去語幹末の *l に 5.3. 節で提案した過去接辞 *-c- がついて *lc > j となり, il ~ ij という交替を示すようになったと考えられる³³。

過去語幹が /n/ で終わる 4 つの動詞は, (36) Krx. man-, Mlt. men- (DEDR 4778, Parji men-/ mend-, mett- 'to be, stay' etc.), (37) Krx. men-, Mlt. men- (DEDR 5516,

³¹ ドラヴィダ語の音韻では, 後続する前舌母音類だけではなく先行する前舌母音類もしばしば口蓋化を引き起こす: 例 現代タミル語 paṭi-tt-a-y [paṭicca:] {study-PST-2SG} 'you studied'.

³² 接近音と *c の子音連続の単純化規則も, 次の例によって支持される:

PDr. *-z-c- > PKM *-s-, e.g. Krx. bi:s-/ bi:sy-, Mlt. bi:s-/ bi:sy- 'to sell', DEDR 5459 Kolami vi'r 'to sell', Parji vi:ṭ, Kui vi:ṭa 'to be obtainable' etc. (Burrow 1968: 66, Pfeiffer 1972: 124f.)

PDr. *-y-c- > PKM *-s-, e.g. Krx. mesga:, Mlt. mesce 'roof', DEDR 5532 Tamil ve:y, me:y 'to cover, thatch' etc.

なお, PDr. *-y-cc-, *-z-cc- も PKM *-cc- に単純化する: 例 Krx. mucc-, Mlt. muc- 'to shut' < *muy-cc-, DEDR 4915 Tamil mu:y- 'to cover', Telugu mu:yu 'to cover' etc. (Pfeiffer 1972: 35); Krx. pacc- 'to grow old', Mlt. pac- id. < *paz-cc-, DEDR 3999 Tamil paḷa 'old' etc.; Krx. pocgo:, Mlt. pocru 'worm' < *puz-cc-, DEDR 4312 Tamil puḷu 'worm' etc.

³³ Krx. elc- 'to fear', Mlt. elc- id., DEDR 858 Tamil elku etc. から考えて, *-lcc-, *-lcc- はクルフ・マルト語で lc となる可能性が高いので, *-lcc- でなく *-lc- と再建した。ドラヴィダ祖語の *-lc-, *-lcc- がクルフ・マルト祖語で *j となった例としては, 次の 2 例があり (Pfeiffer 1972: 80), 独立して例証される: Krx. u:ṭj- 'to collect from door to door', Mlt. u:j- 'to collect taxes or contributions' < *u:l-c-, DEDR 734 Parji ulj- 'to gather'; Mlt. eju 'bear', DEDR 857 Gadaba ilij, Gondi etj etc. < *e[l]-c-.

Telugu vinu/ viŋ- ‘to hear, listen, obey’ etc.), (38) Krx. nan- (DEDR 3589, Tamil naŋŋu ‘to do, make’ etc.), (39) Krx. pā:n-, Mlt. pa:n- (DEDR 4004, Tamil paḷunu ‘to grow ripe’ etc.) のようにドラヴィダ語族中に同源の語が多数例証され、それぞれ PDr. *man-, *wen-, *naŋ-, *paʒn- と再建される。もしこれらに過去接辞 *-t- が付いたとすれば、他に口蓋化要因のない限り、下の(43)において PDr. *nt に対してクルフ語とマルト語で /nd/ が現れるように、前の3つは /nd/ となり、*naŋ- は(21)と同様 /nd/ となったであろうと予測されるから(Pfeiffer 1972: 153), 過去接辞として *-t- ではなく *-c- がつき、鼻音の後で有声化して maŋj- など /ŋj/ をもつ形が生じたと考えるのが自然であろう。

- (43) DEDR 4719 Tamil maruntu ‘medicine’, Telugu mandu id., Kolami mand id. 対 Krx. mandar ‘medicine’, Mlt. mandru

(35) Mlt. ih-/ iŋj- ‘to pelt’ は他に類を見ない交替である。Pfeiffer (1972: 29) はこの動詞の語源として、意味の点でも近い DEDR 805 Tamil ey- ‘to discharge arrows’ etc. から立てられる PDr. *ey- の *e が *y に同化されて *iy- となったものを考えるが、マルト語の非過去語幹 ih- の起源については論じていない。ドラヴィダ祖語やクルフ・マルト祖語の *y が規則的な変化としてマルト語で h になるわけではないものの、クルフ語 beʔ- ‘to be’ に対応するマルト語形が、北部方言において予測される bey- ではなく beh- で現れることから、散発的に y > h という変化があったと考えられる³⁴。h < *y で終わる非過去語幹の過去語幹末に /ŋj/ が現れるのもマルト語動詞では他に例を見ないが、ドラヴィダ祖語で *y で再建される語が PDr. *-y-nc- > PKM *-nj- という発展で /ŋj/ として現れる例が(44), (45)と二つ知られており、それぞれ派生接辞 *-nc- によって *qay-nc-, *piy-nc- となったと再建される。

- (44) Krx. xapiʔ- ‘to bear fruit’, Mlt. qapij- id. < *qay-nc-, DEDR 1459 Tamil ka:y ‘to bear fruit’ (Pfeiffer 1972: 21)
- (45) Krx. piŋj- ‘to name’, Mlt. piŋj- id., DEDR 4410 Tamil peyar ‘name’ etc. < *piy-nc- (Pfeiffer 1972: 29)

またマルト語内部でも、(13) (46) のように /y/ と /ŋj/ が交替したと考えられる派生法があるので、もし *-nc- という過去接辞を想定すれば、*iy-nc- > iŋj- という音変化によって説明することが³⁵できる³⁵。

- (46) Mlt. -nuyu ‘pain’³⁶ ~ nuŋj- ‘to pain’, DEDR 3793 Tamil no:y- ‘to be ill’, Paŋji noy-/ noŋj- ‘to be painful’ etc.

³⁴ 中央部、南部の方言では bey-。なお母音間の y が h となることは、Mlt. ca:he ‘tea’ < *ca:ye < Hindi etc. ca:y のような借用語でも見られる。

³⁵ 母音 i の鼻音化は(28) Mlt. aŋ- ‘to beat the drum’ 対 Krx. ass- ‘to sound’ におけるように、マルト語内部での二次的発展と解釈した。あるいはもし鼻音化がもともと鼻音の分節素があったことを反映しているのなら、*iny-/ *in-c- のように *-c- 過去接辞で説明できるが、その場合 PDr. *cy- とは別の語源を考える必要がある。

³⁶ この名詞は Droese (1884), Mahapatra (1987) には出ないが、中央部方言の現地調査で採取した kuk-nuyu ‘headache’ という語中に確認した。

(47) Mlt. *coṅj-*/ *coṅj-* ‘to tie, fasten’ < (13) Mlt. *cuy-*/ *cu:c-* ‘to put on’

マルト語で **ey-* に由来する *ih-* という非過去語幹があるのに、クルフ語ではなぜないかという疑問が生じるが、非過去語幹と過去語幹が大きく異なる場合、過去語幹が非過去語幹になったと見られる例が (34) のクルフ語形のように両言語中に散見され、過去接辞のついた形を非過去語幹と再解釈する平準化があったことが窺える³⁷。憶測の域を出ないが、(46) *-nuyu* の *nuy* と *nupj-* も、もとは *ih-* (< **iy-*) / *ijj-* と同様の非過去語幹と過去語幹の対であった可能性もある (cf. *Parji noy-*/ *noṅ-* < **no-nc-* < **noy-nt-*, Burrow and Bhattacharya 1953: 53, Emeneau 1957: 42)。なお接辞を **-nc-* と立てたが、先行する **y* は口蓋化を引き起こしうるので、接辞はもともと **-nt-* であり、それが **qay-nt-* > **qay-nc-* > *xaṅjʔ-*, *qaṅj-*, **piy-nt-* > **piy-nc-* > *piṅj-* と同様に **iy-nt-* > **iy-nc-* > *ijj-* となったと考えることもできる。その場合、南ドラヴィダ語派特有の過去接辞とされてきた **-nt-* がクルフ・マルト語にも存在することになる。

5.5. 第2類

クルフ語の /ʔ/ は、形態素境界で母音が後続する場合に現れる音素である (Gordon 1976: 69)。/ʔ/ は動詞の非過去語幹末にしばしば出現するが、ドラヴィダ祖語に遡れない上に、*Krx. barʔ-* ‘to come’ 対 *Mlt. bar-* *id.* のようにマルト語形に対応音がない場合もあり、また音韻的文脈からでは出現が予測できないなど、由来が複雑である³⁸。(10) *Krx. ciʔ-* ‘to give’ 対 *Mlt. ciy-* *id.* におけるように、マルト語の対応形では /y/ が見られることが多い。クルフ・マルト祖形としては、*Krx. /ʔ/*, *Mlt. /y/* に対して、**Q* を措定する³⁹。(48) (49) に見るように、**Q* はクルフ・マルト祖語における母音連続間に起こる (PKM $\emptyset \rightarrow$ **Q* > *Krx. ʔ*, *Mlt. y* / *V_V*) とともに、派生接辞の添加で作られたクルフ語動詞の末尾に見られることが多く、母音連続や母音消失に際して生じる声門閉鎖音のような音素と考えられる。

(48) *Krx. emʔ-*/ *emc-*, *Mlt. amy-*/ *amc-* ‘to take bath’ < PKM **am-i-* from **am-* ‘water’ (Gordon 1976: 69)

³⁷ 過去接辞を非過去語幹に取り込む現象は、テルグ語やカンナダ語など南ドラヴィダ語派、中南ドラヴィダ語派に広く見られる (Krishnamurti 1961: 164f.)。

³⁸ 子音重複で終わる語幹末には /ʔ/ が現れにくいという傾向はあるが、それでさえ *Krx. ʔokkʔ-*/ *ʔokc-* ‘to knock’ のような例外がある。なお、不規則な対応の一因として、クルフ語では「非過去語幹：-ʔなし 対 過去語幹：-y」, 「非過去語幹：-ʔあり 対 過去語幹：-c」という生産的パターンから、過去語幹が -c で終わる動詞の非過去語幹に -ʔ が類推によって添加されたらしいことが挙げられる。*barʔ-* の ? も類推によると思われる。

³⁹ クルフ語の /ʔ/ はまた、/h/ と交替する。インド・アーリア系の動詞 *rah-* ‘to stay’ (CDIAL 10666) からの借用語である *Krx. raʔ-* ‘to be’ の ? は過去語幹 *rahc-* で h と交替し、またクルフ語の動詞 *hoʔ-*/ *occ-* [ʔocc-] (Grignard 1924b) ‘to take’ の非過去語幹では *ʔoʔ- の ? 連続を避ける異化によって *hoʔ-* となったと考えられている (McAlpin 2003: 527)。

- (49) Krx. tɪsgʔ-/ tɪsg- ‘to open’, (Mlt. tɪsg-/ tɪsgy-,) DEDR 3259 Tamil tɪra ‘to open’,
Telugu tɛraɕu ‘to open’ < *tɛt-V-k- (Pfeiffer 1972: 75)

過去語幹においては、接辞が PDr. *-c- だと /s/ など摩擦音になる可能性が高く (Pfeiffer 1972: 151f.), また口蓋化を起す母音類がない以上 PDr. *-tt- も考え難いので、*-cc- という過去接辞がつけられたものと考えねばならない。例えば (50) は DEDR 5517 Tamil ve: ‘to burn’ etc. と同源で、もとは *wi:- であったが、クルフ・マルト語では母音が後続する場合に *Q が挿入され、それに伴って語幹の母音が短縮したと考えられる (Gordon 1976: 69)。

- (50) Krx. biʔ-/ bicc- ‘to be cooked’, (Mlt. bic-/ bic- ‘to be cooked’)

*Q による母音の短縮については、過去語幹の母音のみ長い語があることから支持される：(12) Krx. heʔ-/ he:c-, Mlt. ey-/ e:c- < *ya:- (Pfeiffer 1972: 48), (14) Krx. coʔ-/ co:c-, Mlt. coy-/ co:c- < PDr. *co:- (Pfeiffer 1972: 53)。

5.6. 第3類

第3類は接辞なしに過去語幹が作られるように見えるため、過去接辞要素を見つけるのが難しい。このグループの動詞は、(51) のように Krx. /kʰ/, /x/, Mlt. /q/, /g/ という口蓋垂音に由来すると見られる音、および (52) のように舌尖閉鎖音を語幹末にもつものも多く、それ以外では /s/, /l/, /r/, /y/ で終わるものがある。

- (51) Krx. urkʰ-/ urkʰ- ‘to come out’, Mlt. urq-/ urq-, urqy- id.

- (52) Krx. utʔ-/ ut[- ‘to cover’, Mlt. ut-/ ut- id.

また、例えば Krx. assg-/ assgy- ‘to paste on’ 対 Mlt. asg-/ asg- id. や Krx. xakʰ-/ xakkʰy- ‘to receive’ 対 Mlt. qaq-/ qaq- id. のように、第1類動詞との揺れが頻繁に見られ、特にマルト語で第3類になる場合が多い。このうち、口蓋垂音で終わる非過去語幹に関しては、過去接辞 *-y- がついた場合、調音位置の高さ ([high] 素性) が違うために (特にマルト語で) *-y- が消失したという可能性が考えられる。この説明によれば、第3類 b の二つの動詞、(18) Krx. mo:x-/ makkʰ-, Mlt. mo:q-/ moq- と (19) Krx. (ax-/) akkʰ-, (axc-), Mlt. a:g-/ aq- の過去語幹で起こる母音短縮も、直後に *-qy-, *-gy- という子音連続ができたことによって起こったと理解することができる。クルフ・マルト祖語で口蓋垂音に高い母音類が後続することが忌避されていたことは、Krx. xoppa: ‘shrub’ 対 Parji guppa ‘scrub’ などに見られる高母音の中母音化からも窺われ (McAlpin 2003: 528, 533), また子音重複に伴って起こったと考えられる無声化が上述の Mlt. a:g-/ aq- などに実際見られることから、*-qy-, *-gy- > Krx. kkʰ-, > Mlt. *-qq- > -q- という変化は不自然ではない⁴⁰。クルフ・マルト祖語で起こった子音重複

⁴⁰ *mo:q- に関しては、moʔy- という過去語幹が実際にマルト語の南部方言に確認された。ただし二次的に第1類 b に作り替えられた語形である可能性もある。

は、クルフ語では *moqq- > mokk^h- のように保持されるが、マルト語では *moqq- > moq- と単純化される。この段階の子音重複を「クルフ・マルト祖語における一次の子音重複」と呼ぶことができる。それに対して、動詞 pol- 'to be unable' が子音の前では pol-d-an {be.unable-PRS-1SG} のように重複しないのに、母音の前や語末でのみ poll-a:lag-d-an {be.unable-PROG-PRS-1SG} のように重複することを、「クルフ語における二次の子音重複」と呼べるだろう。マルト語では子音重複はおしなべて単純化され、クルフ語では単純子音であっても短母音の後で重複することから、クルフ・マルト祖語形の判別は容易でない。/y/ の重複を示す語としては、(20) Krx. xa:y-/xayy- (DEDR 1458, Tamil ka:y/ ka:ynt- 'to grow hot' etc.) や Krx. uy-/ uyy- 'to put down' がある。(20) は (18) と同様に母音の短縮を示しており、一次の子音重複の可能性が高い。これらに関しても、過去接辞 *-y- の添加によって *yy という連続が生じたという説明が可能である。

舌尖閉鎖音で終わる非過去語幹をもつ動詞は、たとえばタミル語の第4類動詞が Tamil vitu/ vit- 'to leave' のように過去語幹で子音重複を示すことが過去接辞 *-tt- の添加によって *vit-tt- > vitt- と説明されるのと同様、クルフ・マルト祖語で *t-t- > *-tt- のように *-t- 接辞の添加によって子音重複となったものがクルフ語では保持され、マルト語では単純化して ut-/ ut- のように同形になったと理解することができるようになるかも知れない。しかし、*-tt- のように重複した舌尖閉鎖音は、クルフ・マルト語では無声音になるはずなので、(53) のように有声音で終わる過去語幹を規則的音変化として説明することが難しい。

(53) Krx. idʔ-/ idd- 'to plant', Mlt. id-/ id- id. (DEDR 462)

また、(17) のようなそれ以外の子音で終わる非過去語幹に関しては、*-t- 接辞による説明は適用できない。このように、第3類の動詞のうち *q, *g, *y, *t で終わるものについては *-y- 接辞や *-t- 接辞の添加で説明できるものもあるが、少なくとも一部については、接辞以外の形態的プロセス、つまり子音重複による過去語幹形成が行われていたと考えざるを得ない。

最後に、第3類動詞には、(20) や次の (54) (55) (56) のように語幹が重いライムで終わる語幹で、接辞添加も子音重複も起きないものがある。

(54) Krx. ondrʔ-/ ondr- 'to bring', Mlt. ondr-/ ondr-, (ondry-) id.

(55) Mlt. qe:g-/ qe:g- 'to buy'

(56) Krx. pe:sʔ-/ pe:s- 'to order', DEDE 4430 Tamil pe:cu 'to talk' etc.

その場合、例えば (51) Krx. urk^h-a:, Mlt. urq-a {come.out(PST)-3SG.NM} におけるように、過去3人称形で過去時制を標示する働きを持つものが過去語幹を拡張している -a- 要素のみであり、その由来はどうかであれ、少なくとも共時的には -a- が過去接辞として機能している。

5.7. 第1類

*-i-の添加による過去語幹形成は, Tamil -iŋ-, Toda -y-, Kannada -id-, Tulu -y-, Telugu -iti-/e-, Koṇḍa -it- のように, 接辞 *-t- による過去語幹と並んでドラヴィダ語族に広く見られる。クルフ語, マルト語の第1類動詞が必ずしも他のドラヴィダ語族言語でも *-i-/iŋ- をとるわけではないものの, (2) Krx. att-, Mlt. at- 対 Tamil attu/ atti- ‘to unite’ etc. (DEDR 145), (5) Krx. e:k-, Mlt. e:k- 対 Tamil e:ku/ e:ki- ‘to go, pass, walk’ etc. (DEDR 871) に見られるように, -y- 接辞それ自体はドラヴィダ祖語の *-i-/iŋ- にさかのぼると考えられる。

6. 考察

6.1. クルフ・マルト語の過去語幹の起源

前節で見たクルフ語, マルト語の過去語幹の形成法は, 表4のように要約できる。

表4 クルフ語, マルト語動詞の過去語幹形成法 (カッコ内はクルフ・マルト祖語形。PA: 調音位置の同化, V: 有声化, AOS: 接近音閉塞音単純化, VS: 母音の短縮)

語幹末	PKM の過去語幹	Krx., Mlt. の過去語幹と類	形態音韻規則
PDr. *l (*nal-)	*nal-t	4. Mlt. laq-	PA, V, AOS
PDr. *ŋ (*o:ŋ-)	*o:ŋ-t	4. Krx. onq-, Mlt. onq-	PA, V, VS
PDr. *t (*kuŋ-)	*kuŋ-t	4. Krx. kuŋt-, Mlt. kuŋ-	PA
PDr. *t (*pet-)	*pet-t	4. Krx. pett-, Mlt. pet-	PA
PDr. *z, *y (*poy-)	*poy-c-	4. Krx. poss-, Mlt. pos-	AOS
PDr. *y (*iy-)	*iy-nc-<*iy-nt- ?	4. Mlt. ij-ij-	V, AOS, 口蓋化?
PDr. *l (*il-)	*il-c-	4. Mlt. ij-	V, AOS
PDr. *n (*man-)	*man-c-	4. Krx. majj-, Mlt. mejj-	V
PKM *Q (*ciQ-)	*ci-cc-	2. Krx. cicc-, Mlt. cic-	
制限なし (*pit-)	*pit-y-	1. Krx. pity-, Mlt. pity-	
PKM *q etc. (*mo:q-)	*moqq-	3. Krx. mōkk ^b -, Mlt. moq-	語幹末子音の重複, VS
重ライム (*ondr-)	*ondr-	3. Krx. ondr-, Mlt. ondr-	無変化

過去接辞は, 非生産的で古形の残存と考えられる第4類動詞の過去語幹から *-t- と *-c-, 数の多い第1類から *-y-, そして生産的な第2類から *-cc- がそれぞれクルフ・マルト祖語のものとして抽出される。他のドラヴィダ語族言語では, *-t-, *-tt-, *-nt- と *-i(ŋ)- が過去接辞として確認される (Krishnamurti 2003: 333)。Mlt. iŋ- の解釈によっては *-nc- または *-nt- がクルフ・マルト祖語に再建される可能性がある。5.4. 節で述べたが, 過去接辞 *-nt- は南ドラヴィダ語派と中央ドラヴィダ語派の Parji 語 (Subrahmanyam 1964: 51) にしか見られず, もし正しければ南ドラヴィダ語派とクルフ・マルト語を結びつける重要な事実となる。

クルフ・マルト語の *-c-, *-cc- 接辞が他のドラヴィダ語族言語にも確認できるかどうかを見てみると, 他の語派では *-tt- など歯音の口蓋化に由来すると思われるものが多いことがわかる。クルフ・マルト語の *-cc- 接辞との関連で, Emeneau (1957: 43) は南ドラヴィダ語派の Toda 語の kofy-/ kofc- ‘to escape, hide, dodge’ におけるよ

うな過去接辞 *-c-* (*c* [tʃ]) を **-i-tt-* における口蓋化で説明し、中央ドラヴィダ語派の Parji 語に *ver-* / *veŋ-* ‘to come’, *cay-* / *cap-* ‘to die’ のような **-jɟ-* に由来すると思われる形が現れることについては、上述の Subrahmanyam (1964: 51) や Krishnamurti (1978: 267) が先行する前舌母音類による **-nd-* (< **-nt-*) の口蓋化したものと説明した。中南ドラヴィダ語派の Kui, Kuvi, Pengo, Manda,⁴¹ Koṇḍa の 5 言語では、Kui *man-* / *mas-* ‘to be’, *ven-* / *ves-* ‘to hear, ask’, Kuvi *man-* / *mac-* ‘to be’, *ven-* / *vecc-* ‘to hear’, Pengo *man-* / *mac-* ‘to be’, *ven-* / *vec-* ‘to hear’, Koṇḍa *man-* / *maR-* ‘to be’, *ven-* / *veR-* ‘to hear’ (R [ɾ]) のように、DEDR 4778 **man-* ‘to be’ と DEDE 5516 **wen-* ‘to hear, ask’ の 2 項目においてのみ語幹末の鼻音 /n/ に代わって **-c-*, **-cc-* に由来するとも見える音が現れるが、Koṇḍa の R という反映から考えて、PDr. **-cc-* ではなく **-tt-* に由来するはずである⁴²。テルグ語においては過去接辞ではないものの、*vacc-* ‘to come’, *cacc-* ‘to die’ のように語幹内に **-cc-* 接辞が取り込まれた形が見られ、Krishnamurti (1961: 162ff.) によると、完了副動詞の **-cci*, **-ci* に由来するという。一方、ブラーフイー語では **-c-* が (57) *must* の *s* におけるように閉塞を失うので、*bar-*, *ba-* / *bass* ‘to come’, *mar-*, *ma-* / *mass* ‘to be’ における /s/ は **-c-* の反映と考えることができる⁴³。

- (57) Brahui *must* ‘closed’ 対 DEDE 4915 Tamil *muccu* ‘to cover’, Telugu *muccu* ‘to close’, Krx. *mucc-* ‘to close’ (Krishnamurti 2003: 165)

なおクルフ・マルト語や中南語派が DEDE 4778 **man-* ‘to be’ と同じ種類の過去語幹をもつ DEDE 5516 **wen-* ‘to hear’ には、Brahui *bin-* / *bing* ‘to hear’ が対応し、過去接辞と見られる *-g* は **-k* に由来すると考えられる⁴⁴。ブラーフイー語の *-g* はクルフ・マルト語の *-k-* 接辞や Koraga 語の *-g-* 接辞のように生産的ではなく、起源を異にする可能性もある⁴⁵。

クルフ語、マルト語の **-c-* 接辞も、たとえば (31) Krx. *poss-*, Mlt. *pos-* < **poy-c-* を **poy-t-* の **y* による **t* の口蓋化とするなど、いくつかの動詞については口蓋化した **-t-* 接辞に帰することもできるが、**war-* ‘to come’, **man-* ‘to become’ のように口蓋化要因も類推も考えられない動詞にも *c*, *j* が見られることから、クルフ・マルト祖語に **-t-* と並んで **-c-* を立てることは避けられない (Bloch 1946: 54)。**-c-* 接辞を

⁴¹ Burrow (1976: 48) によれば Pengo と同様の過去語幹を作る。

⁴² Krishnamurti (2003: 164f.) で引かれている PDr. **watt* ‘to dry up’, DEDE 5320 では、PDr. **-tt-* に対して Telugu /t/, Gondi /tt/, Koṇḍa /R/, Kui /s/, Pengo /c/ が対応している。

⁴³ Emeneau (1962b: 34, 1994: 59) は中南、中央ドラヴィダ語派との並行関係から **matt* を立てているが、注 42 で引いた DEDE 5320 で Brahui *ba:rring* ‘to become dry’ と **-tt-* に対して *r* をもつ形があることから、**-tt-* ではなく **-c-* を再建する。

⁴⁴ 仮にブラーフイー語の前段階で語末の *d* が *g* になるような変化があったとすれば、**-t-* などの接辞に帰する可能性もある。子音の音韻変化のデータベースである Kümmel (2007: 228) によると、共通サーミ語で複数主格と二人称単数の語尾に *t > k* / # という変化を指定する説があり、ありえない変化ではないかも知れない。

⁴⁵ ただし、古い接辞が再び生産的になることは、例えばクルフ・マルト語の **-t-* 接辞が、過去語幹中に化石化して残る一方、マルト語の一部方言で生産的過去接辞 *-t-* となっていること (4 参照) に見られ、十分起こりうることである。

立てる必要があるという点では、クルフ・マルト語はブラーフイー語と共通している。

クルフ語、マルト語は過去形に *-k-* 接辞を用いるから南、中南、中央の各語派と異質であると見なされがちだが、以上の議論によって、クルフ語、マルト語はこれらの語派にも見られる接辞 **-t-*, (**-nt-*) **-y-* およびクルフ・マルト語で固有に発達した接辞 **-c-*, **-cc-* で過去語幹を形成し、それに *-k-* 接辞が二重の特徴づけとして添加されたことが明らかになった。それでは、*-k-* 接辞や、いくつもある過去接辞は、いったいどのような関係にあるのだろうか。

これらの過去接辞のうち **-t-* 接辞は、DEDR 600 PDr. **uŋ-/ *uŋ-t-* ‘to drink, eat’, Tamil *uŋ-/ uŋ-t-*, Konḍa=Pengo *uŋ-/ uŋ-t-*, Parji=Gadaba *un-/ unḍ-*, (21) Krx. *on-/ onḍ-*, Mlt. *o:n-/ onḍ-* のように、同じ語根・接辞のセットがブラーフイー語を除く全語派に確認され、祖語に再建できる (Subrahmanyam 1971: 194ff.) ことから、もっとも古い過去語幹形成法であると言える。

-i(n)-* 接辞も、-t-* 接辞に次いで多くの言語で見られるが、PDr. **uŋ-/ *uŋ-t-* のように特定の語根とセットで祖語まで再建されるという例は、(2) DEDR 145 Tamil *attu/ atti-* ‘to unite’, Krx. *att-/ atty-* ‘to put on’, Mlt. *at-/ aty-* id., (4) DEDR 903 Kui *e:ra/ e:ri* ‘to spy’, Krx. *e:r-/ i:ry-* ‘to see’, Mlt. *e:r-/ e:ry-* id. などが見られるものの必ずしも多くなく、例えばクルフ語と Kui 語両方にある *nol-* ‘to ladle out’ という動詞が過去ではそれぞれ Krx. *noly-*, Kui *nolt-*, *not-* となるように、異なる接辞で過去語幹を作るようなケースが多いので、**-i(n)-* は **-t-* よりも遅い段階で個別に発達した接辞であったかも知れない⁴⁶。

さらにクルフ・マルト語では、**-c-* という過去接辞も用いられ、少数の動詞で */s/* や */j/* として現れるが、これは **-cc-* > Krx. *-cc-*, Mlt. *-c-* と作り替えられて (Andronov 2003: 215f.), クルフ・マルト語では借用した動詞にもつけられるなど、生産的な形態素になっている。**-c-* 接辞はクルフ・マルト語の他はブラーフイー語など分布が限られている。

そしてクルフ・マルト語に特徴的な **-k-* 接辞は、これらすべての接辞のさらに後に過去語幹形成法に加わったもので、起源としては、4節で動形容詞接辞 *-k-* に由来する可能性に触れたが、完了副動詞を作る Krx. *ki*, Mlt. *-k-* に由来することも考えられる。他方、クルフ・マルト語が **-k-* という接辞を祖語から過去接辞として受け継いだという議論を支持する根拠は過去語幹中には見られなかった。

また、第3類動詞を説明するために、最終子音の重複による過去語幹、無変化の過去語幹、および過去語幹につけられる語幹延長要素 *-a-* をクルフ・マルト祖語に立てる必要がある。このうち子音重複が過去語幹形成の一形式であったということは、クルフ・マルト語内での形態的改新であったかも知れない。しかし、ドラヴィダ祖語の段階から、非過去語幹末の子音を重複することが過去語幹形成法の一つ

⁴⁶ 一形式一機能という原則で本来の機能を推測するならば、Parji 語において *-i* が完了副動詞を作る接辞であるように (Burrow and Bhattacharya 1953: 58f.), ドラヴィダ祖語においても完了副動詞を作る接辞であったものが過去語幹として取り込まれたものである可能性がある。

として存在したという可能性もある。サンガム文学時代のタミル語には、語末の舌尖音 /t/ /ʈ/ だけでなく、k をもつ puku ‘to enter’ に対して、通常の -nt- 接辞による過去語幹とは別に、pukk-a:n {enter.PST-3SG} (Kalittokai 82.24) のように k の重複で過去語幹を作っている例が見られる (Rajam 1992: 552f.)。カンナダ語 pogu/ pokk- ‘to enter’ も同様である。これらは Lisker (1951) や Emeneau (1967/1994: 93), Subrahmanyam (1971: 191ff.) によって *-t- 接辞の付加によると説明されているが、閉鎖音の子音連続において *k-t > kk のように左から右に同化するということは、音節頭子音のほうが音節末子音より同化を受けにくいという非対称性 (Onset-Coda Asymmetry) から考えて音韻論的に考えにくい。タミル語、マラヤーラム語とカンナダ語で *t (> ʈ), *k, テルグ語で /d/, 中央ドラヴィダ語語の Parji 語で *t (> d), そしてクルフ・マルト語で *q/g, *t/d, *d, *y, *l, 接辞 *-r- と、共通する語幹末子音について起こっていることから、Caldwell (1913: 496f.) が ‘Dravidian reduplication’ と呼んで提案したように、ドラヴィダ祖語に遡る過去語幹形成法の一つとして舌頂音 (ともしかすると *q) が重複されるプロセスを措定し、それがクルフ・マルト語、特にマルト語で拡張される改新があったと考えるほうが事実在即しているのではないだろうか。ドラヴィダ語族では、接辞 *-t- が他動詞接辞であるとともに過去接辞であるなど、他動性と過去時制の形態法の間に並行関係が見られる。また南と中南ドラヴィダ語派の一部には、*t 対 *tt, *nt 対 *ntt, *p 対 *pp, *k 対 *kk という子音重複による自動詞と他動詞の対立 (Krishnamurti 2003: 289) が見られ、Krishnamurti (1997a/2001: 287) はこれがドラヴィダ祖語に由来すると考える。この子音の重複という形態的プロセスが、他動詞語幹の派生だけでなく過去語幹形成にもあったとすると、同様の並行関係が存在することになる。

クルフ・マルト語の第3類動詞の一部で見られる無変化型過去語幹は Parji 語にもあり、しかもクルフ・マルト語と似て、北西方言で -e-/o-, 南部方言で -a- という母音で語幹が延長される (Burrow and Bhattacharya 1953: 54)。またブラーフイー語でも、非過去語幹に -a-/e- をつけて過去語幹を作る形態法が生産的である (Bray 1909: 129, Andronov 2001: 67ff.)。そのように他のドラヴィダ語族言語においても非過去語幹に変更を加えずに行われる過去語幹形成が散見されることから、無変化型過去語幹もしくは *-a/*-e- といった過去接辞が祖語から存在したという可能性も考えられるが、同形・同義で時制のみ異なる二つの語幹を祖語に措定するという不必要に複雑な再建を行うよりは、個々の言語の発展において過去語幹のもつ時制・アスペクト標示機能が摩耗し非過去語幹と過去語幹の機能的対立が曖昧になった結果、個別に起こった形態的改新と考えるほうが自然であろう。

以上、*-t/*-tt-, *-nt-, *-c/*-cc-, 子音重複, *-i(n)-, 無変化+ -a- 拡張, *-k- という7種類の過去語幹形成法の語派による分布を表5にまとめる。

表5 過去語幹形成法の分布

	SDr.	Koraga	Telugu	Kui-Koṅḍa	CDr.	Krx.Mlt.	Brahui
*t/*tt	✓		✓	✓	✓	✓	
*nt	✓				Parji ✓	✓?(iṅj-)	
*c/*cc			(✓)			✓	✓
C 重複	✓		(✓)		(Parji ✓)	✓	
*-i(n)-	✓		✓	✓		✓	
無変化 + a/e					Parji ✓	✓	✓
*k		✓				✓	✓

6.2. ドラヴィダ語族の樹形図モデル

それでは、クルフ語、マルト語の過去語幹形成法は、3で述べたドラヴィダ語族の系統樹モデルにどのような含意を持つであろうか。

クルフ・マルト語の過去形は一見したところ他のドラヴィダ語族から大きく離れて独自の発展を遂げているようだが、非生産的な過去語幹も考慮に入れた場合、ドラヴィダ語族言語の過去語幹形成法をほぼすべて持っていることになり、改新的な外見とはうらはらに古形をよく保持していることが明らかになった。ただし古形の保持ということだけでは系統樹のどこに位置するかの手がかりとはならず、下位区分を考察するためには何が共通の改新であるかを同定することが必要である。

さきに6.1.節で、南ドラヴィダ語派と中南ドラヴィダ語派の一部に見られる *t 対 *tt, *nt 対 *ntt といった子音重複による他動性標示を含んだ過去接辞に触れた。クルフ・マルト語には、*c と並んで *cc があつたと考えられるものの機能上の違いは見られず、*t はあるものの *tt は確認されず、子音重複はあるが他動性とは関係がない。このような時制と他動性という二機能を包含した「かばん接辞」の体系は、ドラヴィダ祖語にあつたものがクルフ・マルト語や中央ドラヴィダ語派で失われて別接辞で表すようになった（複合 → 単独）と考えるよりは、南ドラヴィダ語派などで新たに発達した（単独 → 複合）という形態的改新の可能性のほうが、言語の発達の順序として自然であろう。

過去語幹を作る接辞に関しては、非口蓋化文脈での *-c-/-cc- を持ち、しかもそれが *k- とともに生産的になっているという改新によって、クルフ・マルト語は他の語派と異なっている。それ以外の点では、*-(t)-, *-i(n)- と子音重複型を共有する点で南ドラヴィダ語派と、*-(t)- と *-i(n)- を共有する点で中南ドラヴィダ語派と近く、*-i(n)- を共有しないという点で中央ドラヴィダ語派とはやや離れている。ただし中央語派でも Parji 語とだけは無変化型や子音重複型過去語幹を共有し、おそらく独立の並行的発展と考えられるものの、さらに詳細な比較が必要である。以上から考えると、Grierson (1906: 284) がクルフ・マルト語を南ドラヴィダ語派に近いと考えたことには一理ある。ただし動詞形態法以外の文法面では、三人称の指示対象について男性・非男性という区別をする点でクルフ・マルト語は中南ドラヴィ

ダ語派と中央ドラヴィダ語派に、特に三人称複数で男性・非男性ではなく有生・無生の区別をするという点に関してテルグ語と一致しており⁴⁷、南ドラヴィダ語派と共通点が多いわけではない。

過去語幹に関する限りでは、*-i(n)-を欠く中央ドラヴィダ語派がクルフ・マルト語より先に残りのドラヴィダ語から分岐したと想定することも可能である。しかし McAlpin (2003) の提示した *q と *k, *k と *k の融合のほうが、独立した並行的発展ではない共通の改新と言える上、図1の樹形図の変更を迫るほどの共通性がクルフ・マルト語と南ドラヴィダ語派、またはクルフ・マルト語と中南ドラヴィダ語派の間にあるとは言いがたい。クルフ・マルト語が南語派や中南語派と共通点があることは、系統樹における分岐の順番によってではなく、クルフ・マルト語が保守的な形態法をもっていたためであると考えたほうが矛盾なく理解できるだろう。

クルフ・マルト語とブラーフイー語の3言語は、語彙や音韻の点で共通の改新を経たためでなく、古形の保持によって類似しているに過ぎない、ということが McAlpin (2003) の主張であった。本論文では、従来指摘されてきた -k- 接辞よりもむしろ、3言語が非口蓋化文脈における *-c- 接辞を共有していることと、Brahui max-/maxa:- 'to laugh' におけるように非過去語幹に -a:-/-e:- をつける生産的な過去語幹形成法がクルフ・マルト語の第3類の無変化の過去語幹に類似している (5.6. 節参照) ことに注目する。前者はブラーフイー語においてはわずかに残存するのみであり、後者は Parji 語にも見られることから、これらの改新は3言語を「北ドラヴィダ語派」と呼びうるほど決定的ではないかも知れないが、ブラーフイー語とクルフ・マルト語が語派であった可能性は依然として高いし、語派でなかったとしても並行的発展を引き起こすような長期間の接触があったことを考える必要はあるだろう。3言語の文法には、ブラーフイー語で xara:s 'a bull', xara:s-ta: 'of the bulls' のように複数属格を含む複数斜格形を -t- で作るのに対して (Bray 1909: 42f.), クルフ語、マルト語で接辞 Krx. -ta:, Mlt. -te によって名詞から形容詞を派生する (Krx. padda: 'village': padda:-ta: 'of the village', cero: 'yesterday': cer-ta: 'of yesterday', Mlt. ine 'today': in-te 'of today') など、まだ注目されていない類似性もあり、派生形態法などでさらに研究が進めば語派であったことが証明されるかも知れない。なお改新的ということは早期に分岐したことを必ずしも意味しないので、語派でない場合、クルフ・マルト語より後にブラーフイー語が分岐した可能性も考慮されるべきである。

クルフ・マルト語は、ドラヴィダ語族中で最も早期、ブラーフイー語の後または前にドラヴィダ祖語から分岐した語派と考えられるが、古い形態法をほぼすべて失ったブラーフイー語とは異なり、中央、中南、南ドラヴィダ語派と共通の過去語幹形成法を痕跡としてとどめている。これら3語派のうちでは、南ドラヴィダ語派と共通点がやや多いが、それは同語派であったとか分岐後も接触があったというよ

⁴⁷ マルト語の多くの方言で3人称非男性代名詞はテルグ語と異なり、単数、複数とも同形の a:d だが、北西方言では3人称無生複数の指示詞として a:w が見られる。

りは、クルフ・マルト語と南ドラヴィダ語派がともに保守的な形態法をもっていたためであろう。

略号一覧

CDIAL: Turner (1962-66), CDr.: Central Dravidian, DEDR: Burrow and Emeneau (1984), EXCL: exclusive, INCL: inclusive, Krx.: Kurux, M: masculine, Mlt.: Malto, NM: non-masculine, NPST: non-past, PASS: passive, PDr.: Proto-Dravidian, PKM: Proto-Kurux-Malto, PL: plural, PROG: progressive, PRS: present, PST: past, SCDr.: South-Central Dravidian, SDr.: South Dravidian, sg: singular.

参 照 文 献

- Andronov, Mikhail S. (2001) *A grammar of the Brabui language in comparative treatment*. München: Lincom Europa.
- Andronov, Mikhail S. (2003) *A comparative grammar of the Dravidian languages*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Andronov, Mikhail S. (2006) *Brabui, a Dravidian language*. München: Lincom Europa.
- Benveniste, Émile (1946 [1947]) Structure des relations de personne dans le verbe. *Bulletin de la société de linguistique de Paris* 43: 1-12.
- アジア・アフリカ言語文化研究所 (1967) 『アジア・アフリカ言語調査票 上』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- Bhaskararao, Peri (1980) *Koṇekor Gadaba: A Dravidian language*. Pune: Deccan College.
- Bloch, Jules (1946) *Structure grammaticale des langues dravidiennes*. Paris: Adrien-Maisonneuve.
- Bray, Denys (1909) *The Brabui language*. part 1. Calcutta: Superintendent Government Printing.
- Bray, Denys (1934) *The Brabui language*. part 2 and part 3. Delhi: Manager of Publications.
- Burrow, Thomas (1968) The treatment of Primitive Dravidian *-r- in Kurux and Malto. In: Bhadriraju Krishnamurti (ed.) *Studies in Indian Linguistics: Professor M. B. Emeneau Śaṣṭipīrti volume*, 62-69. Poona: Linguistic Society of India.
- Burrow, Thomas (1976) A sketch of Manda grammar in comparison with Pengo. In: Agesthalingom S. and P. S. Subrahmanyam (eds.) *Dravidian linguistics V*, 39-56. Annamalainagar: Annamalai University.
- Burrow, Thomas and S. Bhattacharya (1953) *The Parji language: A Dravidian language of Bastar*. Hertford: S. Austin.
- Burrow, Thomas and Murray B. Emeneau (1984) *A Dravidian etymological dictionary*. 2nd ed. Oxford: Clarendon Press.
- Caldwell, Robert (1913) *A comparative grammar of the Dravidian or South-Indian family of languages*. 3rd edition. London: Kegan Paul, Trench, Trubner (Reprinted in 1974 by Oriental Books Reprint, New Delhi).
- Droese, Ernest (1884) *Introduction to the Malto language*. Agra: Secundra Orphanage Press (includes *The Malto vocabulary*, ii + 109pp.).
- Elfenbein, Josef (1987) A periplus of the "Brahui Problem". *Studia Iranica* 16: 215-33.
- Emeneau, Murray B. (1957) Toda, a Dravidian language. *Transactions of the Philological Society* 1957.2: 15-66.
- Emeneau, Murray B. (1962) *Brabui and Dravidian comparative grammar*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Emeneau, Murray B. (1967) South Dravidian languages. *Journal of the American Oriental Society* 87: 365-413.
- Emeneau, Murray B. (1984) *Toda grammar and texts*. Philadelphia: American Philosophical Society.
- Emeneau, Murray B. (1988) Proto-Dravidian *c- and its developments. *Journal of the American Oriental Society* 108: 239-68.

- Emeneau, Murray B. (1994) *Dravidian studies: Selected papers*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Gordon, Kent H. (1976) *A phonology of Dhangar-Kurux*. Kathmandu: Summer Institute of Linguistics and Institute of Nepal and Asian Studies, Tribhuvan University.
- Grierson, George A. [edited by Sten Konow] (1906) *Linguistic survey of India*, Vol. 4. Calcutta: Government of India, Central Publication Branch.
- Grignard, André (1924a) *A grammar of the Oraon language and study in Oraon idiom*. Calcutta: Catholic Orphan Press.
- Grignard, André (1924b) *An Oraon-English dictionary in the Roman character*. Calcutta: Catholic Orphan Press (Reprinted in 1986 in New Delhi: Unity Book Service).
- Hahn, Ferdinand (1911) *Kurukh grammar*. 2nd edition. Calcutta: Bengal Secretariat Press.
- Kothandaraman, R. (1976) Finite verbs in Tamil — Some preliminary observations. In: Agesthalingom S. and P. S. Subrahmanyam (eds.) *Dravidian linguistics V*, 353–63. Annamalainagar: Annamalai University.
- Krishnamurti, Bhadriraju (1958) Proto-Dravidian *z. *Indian Linguistics (Turner Jubilee Volume 1)* 19: 259–93 (Reprinted in Krishnamurti 2001: 42–75).
- Krishnamurti, Bhadriraju (1961) *Telugu verbal bases*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Krishnamurti, Bhadriraju (1975) Gender and number in Proto-Dravidian. *International Journal of Dravidian Languages* 4: 328–50 (Reprinted in Krishnamurti 2001: 133–53).
- Krishnamurti, Bhadriraju (1978) On diachronic and synchronic rules in phonology. *Indian Linguistics* 39: 252–76 (Reprinted in Krishnamurti 2001: 183–203).
- Krishnamurti, Bhadriraju (1997a) The origin and evolution of primary derivative suffixes in Dravidian. In: Hans Heinrich Hock (ed.) *Historical, Indo-European and lexicographical studies, a festschrift for Ladislav Zgusta on the occasion of his 70th birthday*, 87–116. Berlin: Mouton de Gruyter (Reprinted in Krishnamurti 2001: 284–306).
- Krishnamurti, Bhadriraju (1997b) Proto-Dravidian laryngeal *H revisited. *PILC Journal of Dravidic Studies* 7: 145–65 (Reprinted in Krishnamurti 2001: 323–44).
- Krishnamurti, Bhadriraju (2001) *Comparative Dravidian linguistics: Current perspectives*. Oxford: Oxford University Press.
- Krishnamurti, Bhadriraju (2003) *The Dravidian languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kümmel, Martin (2007) *Konsonantenwandel*. Wiesbaden: Reichert Verlag.
- Lisker, Leigh (1951) Tamil verb classification. *Journal of the American Oriental Society* 71: 111–4.
- Mahapatra, B. P. (1979) *Malto—An ethnosemantic study*. Mysore: Central Institute of Indian Languages.
- Mahapatra, B. P. (1987) *Malto-Hindi-English dictionary*. Mysore: Central Institute of Indian Languages.
- McAlpin, David W. (2003) Velars, uvulars, and the North Dravidian hypothesis. *Journal of the American Oriental Society* 123: 521–546.
- Pfeiffer, Martin (1972) *Elements of Kurux historical phonology*. Leiden: E. J. Brill.
- Puttaswamy, Chaithra (2009) Structure of verbs in Malto. *Journal of South Asian Linguistics* 2: 73–90.
- Rajam, V. S. (1992) *A reference grammar of Classical Tamil poetry*. Philadelphia: American Philosophical Society.
- Ramaswami Aiyar, L. V. (1929) Dravidian notes. *Journal of the Bihar Oriental Research Society* 15: 116–128.
- Steever, Sanford (1993) *Analysis to synthesis*. New York and London: Oxford University Press.
- Subrahmanyam, P. S. (1964) Two problems in Parji verb forms. *Indian Linguistics* 25: 47–55.
- Subrahmanyam, P. S. (1969) The Central Dravidian languages. *Journal of the American Oriental Society* 89: 739–50.
- Subrahmanyam, P. S. (1971) *Dravidian verb morphology*. Annamalainagar: Annamalai University.
- Turner, Ralph L. (1962–66) *A comparative dictionary of Indo-Aryan languages*. London: Oxford University Press.
- 吉田和彦 (2006) 「印欧語における中・受動態動詞の先史—ヒッタイト語からの新たな根拠—」『言語研究』130: 43–82.

連絡先：
 〒 113-0033
 東京都文京区本郷 7-3-1
 東京大学大学院人文社会系研究科
 言語学研究室
 masatok@L.u-tokyo.ac.jp

[受領日 2011年3月31日
 最終原稿受理日 2011年6月4日]

Abstract

The Past Stem of Kurux and Malto

MASATO KOBAYASHI
University of Tokyo

Kurux and Malto, together with Brahui, have been considered to be the first subgroup to branch off Proto-Dravidian. Based on the assumption that traces of older morphology are preserved in the lexically idiosyncratic past stems to which the current past suffix is attached, we analyzed what older past suffixes are incorporated in those past stems.

The past stems ending in coronal stops such as *ond-* ‘to drink’, *kuɬ(t)-* ‘to be hot’, and *pet(t)-* ‘to take up’ are explained by the addition of **-t-*, the best-attested past suffix of Dravidian. Those ending in *-y-* date back to **-i(ŋ)-*, another well-established Dravidian past suffix. The productive class of past stems in *-c(c)-* such as *barc-* ‘to come’ and *cic(c)-* ‘to give’, and the relic past stems in *-s-* and *-j-* such as *pos(s)-* ‘to fall’ and *mej-j-* ‘to hear’, respectively date back to **-cc-* and **-c-*, past suffixes which are considered to be an innovation in Kurux-Malto, and possibly in Brahui as well. *-ŋj-* in *ijj-* ‘to shoot (an arrow), to pelt’ might be a rare reflex of the Proto-Dravidian past suffix **-nt-*.

Of the Dravidian past stems in 1. **-t(t)-*, 2. **-i(ŋ)-*, 3. **-nt-*, 4. stem-final gemination, 5. **-k-*, 6. **-c(c)-*, and 7. **-a/e-*, Kurux-Malto shares the first four with South Dravidian, 1 and 2 with South-Central Dravidian, 1 with Central Dravidian (and also **-nt-*, stem-final gemination, and **-a/e-* with Parji), and 5 to 7 with Brahui. The result of our research indicates that Kurux-Malto preserves archaic features of Dravidian verbal morphology despite the fact that it is highly innovative in many other respects.